



ル
デ
晴
レ

ドイツ・ブラウン社の工業デザイナーの製品デザインをたどる

「純粋なる形象—ディーター・ラムスの時代」(2008年11月~09年1月、サントリーミュージアム [天保山])。三百数十ページのはずの図録は、アートディレクターのシマダタモツさんが突っ走って約800ページに膨れ上がり、企画した学芸員の植木啓子さん、印刷を担当するアサヒ精版印刷のマリさん(築山万里子さん)は頭を抱えた——。

文・松井宏員 写真・岩本浩伸 デザイン・シマダタモツ

オール大阪心血マラソン

図録のページがべらぼうに増えたのは、シマダタモツさんが写真を増やしただけではなかった。ドイツのキュレーターから解説原稿が送られてくるはずだったが……。植木啓さんが振り返る。

「ドイツ人はドイツ人でいつまでも原稿が来ない。来たら来たでなんぼ書くねんというほど予定オーバー(とため息をつく)」

その原稿はシマダ事務所にファクスで送られてきた。カラーページの印刷が始まろうとしていたある朝、マリさんが事務所に行ったら、ドイツ語のファクスが延々と吐き出されていた。

シマダ事務所は当時京橋にあり、植木さんは近くにマンションを借り、朝はミュージアムに出勤して夜はシマダ事務所で行方の3時か4時まで作業、という生活を約1カ月半続けた。「それでも間に合わないと思いました」

シワ寄せでは済まないくらい寄りまくったシワを伸ばすために、マリさんは頭をひねった。ページは増えても予算は増えない。当初予定では、フルカラーで質の高い紙を使うはずだったが、「紙の質はあきらめてくださいね、時間がないから本紙校正ではなく簡易校正で、ページ数増やすなら印刷しやすい16ページ単位で、とか条件をつけまくりました」。

だいぶ分厚くなるので、解説の紙を薄くしたい。たまたま別の仕事で薄紙を調べていたマリさんは「辞書用紙を使いましょ」と提案。シマダさんは「それ、ええわ」と即答。プロ同士の話は早い。

全ページをシマダさんとこでデザインして入稿し、マリさんはそれを製版現場に持って行く。少しでも早く原稿を印刷に回したいマリさんは、シマダ事務所に日参。印刷工場の機械は貸し切り状態で、工場の床に段ボールをひいて寝るわ、人生初の5日連続徹夜は経験するわ。

シマダさんが苦笑い。「マリちゃんが鬼のように朝と夜、事務所に来て、『入稿して』『今日は何ページできる?』。それに毎晩うなされて『すまんけど、一回来んといってくれる』。事務所全員、死にかけてたし」

シマダさんが死にかけてたのには、もう一つ理由があった。「ラムスのデザインはシンプルで、白黒の妙とかレイアウトのきれいさとか考えたら、意外とうちの出る幕ないんちゃう? 展覧会のために何かできるものは……」と考えて、オリジナルフォント(字体)=写真=を作ることにしたのだ。

監修してもらったフォントメーカーに「アルファベットに日本人が挑戦すんのか、アホやな」と言われながら、半年かかって作り上げた。何が違うのかといえば、eの下の曲線が短いとか、線の太さを修正するとか、そういう細かい作業だ。

植木さんは言う。「これが、私が言った『世界で一番美しい一回転を見せて』の答えだったんですよ。オール大阪に迷惑を掛けて、でもできた。走りながら作って、意外と走れたんです」

紙の質は落としたが、「デザインも写真もいいので、映えるんです。製品自体がシンプルなんで、紙も凝ったもんはいらん。図録も機能性重視で」とマリさん。

ようやく図録の全体ができたのが、展覧会の1、2週間前。そこから図録のイメージを投影した会場の空間構成が大慌てで始まった。内覧会前日、展示はできたが箱なんか散乱してる会場で、疲れ果てた植木さんは寝てしまった。